

なだいなだ

透

明

人

間

街

を

ゆ

く

なだいなだ  
透明人間 街をゆく

文藝春秋

透明人間、街をゆく

昭和四十八年十月三十日 第一刷

定価 六〇〇円

著者 なだいなだ

発行者 檜原雅春

東京都千代田区紀尾井町三

発行所 株式会社文藝春秋

電話(〇三)二六五一一二(大代表)

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

○著者略歴

昭和四年東京生まれ。本名堀内秀。慶応大学医学部卒業後、フランス留学。

現在、国立久里浜病院勤務

医学博士。

○著書

小説「れとると」「しおれし花飾りのことし」

随筆「人間この非人間的なもの」他

透明人間、街をゆく

装幀 山本美智代

覆面をとって……………7

子殺し流行時代……………15

親子の間に介入する国家……………17

この日以外は誰のもの……………23

一〇年のちの遺児は……………25

文学的事件……………33

ノーベル賞は五輪に非ず……………35

消え去った幻想の武士……………41

お静かに、お眠りください……………46

ワイセツ 風俗……………51

猥褻な人が猥褻を叱る……………53

幻覚流行の背景……………57

風俗が隠している意味……………61

消費者運動……………67

「馬肉」で売れる頭を持て……………69

業者・主婦連で馬肉連合を 72  
自然な食品がほしい 75  
文化財保護にも順序がある 81  
国民はヒネくれませすよ 86

スボーツ…………… 91

根性ちゃん気をつけて 93

衣の裾のほころびよ 96

コンピュータの呪術 101

紳士の仮面が落ちる時 106

否定された特権的視角 109

世相…………… 115

間抜けさと秘密主義 117

恐怖を与える組織力 121

大いなる幻影 125

フーテンを待ちながら 130

虚名を取巻く孤独な人々 134

「安全型」エネルギー 138

失墜する權威の象徴 142

踊る阿呆と踊らぬ阿呆 146

マンガ家が先生とよばれる時 150

事件に対する社会的反応 …………… 157

白痴的な道徳的反応 159

例によって小説風に…………… 163

同情では解決できない 167

生命尊重から死刑とは 170

正常と異常の反転 175

記述から推理へ 179

どっちがまともか 182

変質者といつてすますな 186

われもかれも人間である 190

匿名が増幅する疑惑 194

法によらない体刑 198

教育…………… 203

人つくりより金もうけ 205

まず人間として見直せ  
有用無用論より事実を  
212 209

医学と医療……………217

「斜陽病」の中で深まる矛盾……………219

おろすことの不名誉……………222

泥沼の中の医学教育……………226

営利が変える医療の価値……………229

無知の善意を利用するな……………232

保障なき晩年……………235

医学教育の新たな道標……………238

「医は仁術」の神話にメスを……………242

機動隊は何を守ったか……………246

未来を思う……………253

布告なき開戦の日を憶う……………255

閉じ込められなかったエロス……………261

体制の侍女としての性……………276

覆面をとって



もう何年前になるだろうか、朝日ジャーナルから、「社会観察」という欄をもうけるので、匿名の執筆者グループに加わってくれないかと、たのまれた。私は、覆面でものを書くのも面白かろうと、気軽にひきうけた。

「なだ いなだ」という私の名は、もちろんペンネームである。このペンネームでものを書きだした時、それは匿名で書くことと、あまり変りはなかった。実名で書こうが、新人は、みな匿名で書いているよなものだが。初期の短編が、文藝界に発表された時、それを読んだ篠田一士が、私に葉書をくれたことがある。「見知らぬ貴女に、こんな手紙を書くのは……」という書きだし、非常にやさしいところが、女性であるか女のものか、わからぬ名前である。だが、篠田一士は「半世界」という同人誌をつくりはじめた時、私たちのグループの会合に、客分みたいな形で来たことがあり、本名で呼ばれていた、なまいきで議論すべきな私と、日本語の美について論戦したこともあったのだ。ちっとも「見知らぬ貴女」などではなかった。私は、彼が女性にあまいな、と思つて、その葉書を読みかえした。「なだ いなだ」が、あの青くさい、くそいまましい、あげあしどりの議論家の青年だと知ったら、あんなに感

激してくれることもなかっただろうと思う。

こうして、「なだ いなだ」も、匿名的人物として出発したのだった。その頃、私は病院の医者だったが、患者も職員も、私がかきであることを知らなかった。中学の友人も大学の同級生も、旧陸軍幼年学校の同期生たちも、しばらくの間、それを知らなかった。だが、日がたつにつれ、私はいつの間にもやら、「なだ いなだ」になりすますことになった。もはや、匿名性は消え去ってしまった。今では本名の方が、ずっと匿名的だろうと思う。

その私に、もう一度、匿名でものを書く機会がおとすれた。私は朝日ジャーナルにもうけられた「社会観察」に、他の数人の人たちと匿名の文章を寄せることになったのである。

匿名には、たしかに闇打ちの陰湿さと結びついたようなところがある。それが、匿名でものを書く筆者に、ある種のうしろめたさを感じさせる。しかし、一方では、国民総背番号制度に見られるように、すべての人間を登録済みの状態におこうとする管理社会の傾向のもとにあって、それは人間を解放する性質を持っている。

私は、大佛次郎さんの「鞍馬天狗」に、胸をおどらせながら、少年時代を育った一人だ。あの覆面の武士の活躍には、闇打ちの陰湿さは、どこにもなかった。あの人物の魅力は、あの覆面におおわれた素性の知れない人間の当時の、義理の支配から解放された行動の自由さにあった。社会的人間は、いくら自由に行動しようとしても、さまざま人間関係によってしぼりつけられている。義理人情はやくぎの世界ばかりではなく、解放されたはずの近代人をも、まだ、程度の差こそあれ、しぼりつけている。いや、現代では、党派性が政治の上で、ふたたび強められる傾向があり、ある一つの党派に属するために、

その党派に関するかぎり、言論の自由が失われることさえある。覆面によって素姓をかくすことは、そうした状況にあつては行動の自由を得る一つの方法なのだ。そこから、覆面の人間がヒーローとなることが、おこりえたのだろう。子供たちのあいだで、現在人気のある仮面ライダーも、おそらく、その仮面に魅力の一部分があるのではないかと思う。

社会観察の原稿を書くようになってから間もなくのことであつた。編集部の人が、

「こんな投書がきましたよ」

と、一通の読者欄への投書を見せた。その投書者の名前を見て、私はおやおやと微笑した。それは、私の知っている人からのものであつたからだ。

私は、昔から少なまきな人間と思われているところがあつて、それは私の不徳のいたすところだから仕方がないが、その素顔のイメージのおかげで、私の意見など聞きたくもないという同僚が、何人かいる。シェークスピアは、「耳で見、目で聴くばかはおらん」というが、目が耳をふさぐことはあるらしい。その反対に、私の意見となると、自分でも少々こじつけだなど思っているのに、なんでも面白いといつてくれるものもある。その投書して来た人物は、私が何かいえば、かならず反論をのべる前者のタイプの男であつた。ところが、その投書を見て、私は思わず彼にウイंकでもしてやりたくなつた。彼は、私の意見に同意し、賛成し、支持し、この文章を書いた人間をほげまじさえていたのである。私は、人間が、いかに、日頃思想を人そのものと結びつけることによって、人物の陰に思想を追いやっているかを知つたのであつた。

私は、こうして、匿名の文章を書きながら、自分が覆面して歩くことを楽しむような気分を味わった。いや、覆面というのは、古典的な表現すぎる。透明人間になった気分とでもいった方が、現代人にはびったりくるだろうか。

私は、こうして数年間の間、秘密な情事めいた楽しみの時間をすごした。

「社会観察」は、新聞の社会欄にとりあげられた事件を出発点とし、それにこだわらず、自由な意見をのべることをめざしたものだ。それで、時には、新聞の社会欄記者たちの事件のとりあげ方を、批評したり、皮肉ったり、からかったりすることにもなった。だが、それは、反新聞をめざしたものということはできない。新聞の記事は匿名的なものと思われがちだが、実際には、決して匿名的でないのだ。新聞は、ケシカラニズムと私が名付けた、決して偏狭でないとはいえない正義感によって署名されているのである。そして、それ故に、どうしても自由に発言することができない面がある。それが型どおりの紙面を作りあげるのだ。私たちは、それを指摘し、そうすることで、ある側面の部分に人々の目を向けさせたかったのである。だから、首尾一貫した論陣をはるのは、まったく対照的な姿勢で仕事をした。むしろ、首尾一貫しないことで、逆に自由な発言を試みたのだともいえよう。これは、逆説的に聞こえるかも知れないが、人間が、そもそも矛盾のかたまりのような存在なのであるから、首尾一貫しないことの方が、むしろ人間的といえるのである。人間は、実際には、ヨットのようには、ジグザグにしか前進しえないのだ。一直線につき進むことは、ごく例外的なのである。

ここに集めた文章は、数年前の社会欄をにぎわした大小の事件について書かれたものばかりである。だが、読みかえてみると、それらの事件が、決して終っていないことを感じる。新聞が語ることをや

めてしまっただけで、そのため、私たちのように、マスコミを触角として事件にふれるだけの人間は、その事件から遠ざけられてしまっただけなのである。事件は、なお、私たちの視角の陰で続いているというわけだ。そこで、私は、それらを集めて、本にすることも、あなたがち無意味なことではあるまいと思った。だが、本にするにあたって、私は覆面をぬぐことにした。朝日ジャーナルの「社会観察」の欄も消滅してしまったし、もはや覆面の意味は、存在しなくなったからだ。

そのかわり、その文章をめぐる事件について、少しばかり、今の私の匿名的でない感想などを、書きくわえることにした。もし、これらの事件そのものが、すでに忘れ去られているにしても、それについて書かれたことが、まだなにがしかの意味を持っているとしたら、それらの事件は、決して終わっていないのだといえるだろう。

これは、社会を鳥瞰するような本ではない。新聞紙に穴をあけて、そこから向こうにある社会をのぞいているといった本だ。そこには、「よしの髄から天井のぞく」ような、狭い視野が感じられるかも知れない。だが、そのかわり事件の肌ざわりのようなものが、そこにあると思う。

\*

人間の記憶の射程のなんと短いことか。もし、人々が、これらの文章が書かれるきっかけになった事件をおぼえてくれたら、解説などは不要なのだが。そして、それらの事件がきっかけになって、ほんとうに、二度と似たような事件が起きないように対策がとられていたら、これらの文章そのものが、

意味を持たなくなっているであろうに。

だが、事件の記憶だけが、人々の脳の底に埋もれただけだから、私は、自らの文章に解説を加える役を、自分でこなわねばならない。